



アメリカ

環境にやさしいコンピュータで 温室効果ガスを削減

環境にやさしいコンピュータ機器の効果についてまとめた初めての報告書が7月18日に公表され、アメリカ環境保護庁（EPA）の認証をうけた360万台以上のコンピュータやモニターが、温室効果ガスの削減に大いに役立ったことが明らかになりました。

報告書によると、これらのコンピュータ機器によって、電力消費量を年間137億kWh（120万世帯の電力消費量に相当）節約することができ、温室効果ガス排出量を年間107万トン（自動車85万2000台分に相当）削減することができたということです。これは、環境にやさしいコンピュータ機器が、アップグレードやリサイクルがしやすい設計になっていることによるものです。

さらに、カドミウムや鉛、水銀の使用量が少なく、有害物質の使用量も1070トン減らすことができたそうです。

UNEP

煤が地球温暖化を加速

カリフォルニア大学スクリpps海洋学研究所の研究チームは、煤などの大気汚染物質が充満した「茶色の雲」によって、下層大気の太陽熱の吸収量が50%増加するという研究結果を科学誌「ネイチャー」（8月2日付）に発表しました。これにより、ヒマラヤの氷河が過去50年間に後退した理由も説明できるとしています。

今回、ラマナサン教授率いる研究チームは、モルジブ上空で小型の無人飛行機を飛ばして、茶色の雲に含まれる煤の濃度、太陽光の吸収などに関するデータを入手。コンピューターの気候モデルに入力し、シミュレーションを行いました。

この結果、従来、茶色の雲は温室効果ガスによる大気の温室効果を50%カットすると考えられてきましたが、東南アジアにおいては、茶色い雲に含まれる煤の粒子が、逆に大気の温暖化を50%程度加速していることが明らかになりました。

UNEP

アフリカの環境問題を考える 「地域子ども会議」を開催

アフリカが直面する環境問題について話し合うため、アフリカ35カ国とノルウェーの子ども達約200人がカメルーン的首都ヤウンデに集まり、7月30日～8月2日まで「地域子ども会議」が開催されました。

この会議は、2008年6月17日～21日にノルウェーで開催されるUNEP世界トウンザ環境会議の準備会議として、ノルウェーのヤング・アジェンダ21による資金援助を受け、カメルーン環境・自然保護省、UNICEF、UNDP、UNESCOが共同で開催しました。

会議では、気候変動、森林と生物多様性、土壌劣化と砂漠化、水資源、廃棄物管理とリサイクルといった問題について話し合うとともに、日常生活での環境にやさしい行動の実践例をお互いに報告しました。また、フィールドトリップや、「10億本植樹キャンペーン」の一環としてヤウンデで5000本の植樹を行いました。

ドイツ

発電に占める 再生可能エネルギーの割合が14%に

ドイツ連邦環境省は、発電に占める再生可能エネルギーの割合が、2007年末までに約14%に到達するという予測を8月3日に発表しました。

これは、2007年の電力需要が2006年と同様であるという前提で、気象条件を考慮して算出した数値です。ドイツは、2010年までに電力消費量の12.5%を再生可能エネルギーで供給することを目標にしていますが、今回の予測はその達成を示すものです。

発電に占める再生可能エネルギーの割合は、2000年に6.3%でしたが、2005年には10.4%、2006年には12%と増え続けています。

ガブリエル環境大臣は、「再生可能エネルギーは、気候保護、さらにエネルギー供給の安全保障にとっても重要な柱となっている」とコメントしました。

タイ

メコン川流域の環境報告書を公表

UNEPとタイ環境研究所は、大メコン圏の環境状況に関する初めての報告書を7月12日に公表しました。大メコン圏は、カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ、ベトナム、中国南部（雲南省など）で構成される地域です。

世界で最も急速に発展しつつある地域ですが、経済成長と人口の急増により、公害、土壌劣化、天然資源の減少などが生じていると報告書は指摘します。

特に重大な問題となっているのは、森林の減少や農業に起因する土壌の劣化、水質・大気の汚染、および生物多様性の喪失です。これらの問題に対策を講じなければ、エコシステムの破壊につながり、貧困層や地方の住民が、健康問題、自然災害、食糧危機、コミュニティの崩壊といった危険にみまわれる可能性が増すとしています。